聖　書：士師記 15：1〜20

説教題：呼ばわる者の泉

日　時：2014 年 10 月 26 日

今日の章を読む上で、前回見た 14 章 4 節の御言葉を押さえておくことはとても重要です。14 章 4 節：「彼の父と母は、それが主によることだとは知らなかった。主はペリシテ人と事を起こす機会を求めておられたからである。そのころはペリシテ人がイスラエルを支配していた。」 主がペリシテ人と事を起こす機会を求めたのは。イスラエル人がペリシテ人に支配されつつも、主に叫び求めることさえしない状態に落ちてしまっていたからでした。すなわち霊的無感覚の状態です。イスラエルはペリシテ人を主として、彼らとの偽りの平和に生きるべき民ではなく、主の民として主に従い、その生活をもって全世界に主を宣べ伝えるべき民でした。そこから今や大きく落ちてしまって、ペリシテ人の支配下で満足している彼らを解き放つために、主はペリシテ人と事を起こそうと働いておられたのです。その際、主はまさかと思われる仕方でこの御心を進めておられたことを前回見ました。すなわちサムソンがペリシテ人の娘と結婚したいと言い出してきかないことを用いて、です。異邦人との結婚は律法の書にある通り、主の良しとされるところではありませんが、そんな戒めなど無視して自分の好きなように生きようとするサムソンの悪を用いて主はそのことを進めておられた。今日の章もこの視点で見て行かないと、良く分からなくなってしまいます。

1 節でサムソンはペリシテ人の妻のところへ行きます。そこで彼が分かったことは、彼の妻はすでに他の客に与えられてしまったということです。彼女の父親は、まだその妹がいるから、彼女をもらってくれないかと提案しますが、サムソンの怒りは収まりません。彼は「今度、私がペリシテ人に害を加えても、私には何の罪もない」と言って出て行き、何とジャッカルを 300 匹捕らえ、その尾と尾をつないでその間にたいまつを取り付け、火をつけて、ペリシテ人の麦畑に放ちます。当然、その畑は全部燃えてしまいます。1 節に「小麦の刈り入れの時に」とあったように、ちょうど収穫の時期でしたので、ペリシテ人は大損害を受けることとなります。

ペリシテ人はこれで黙っていません。彼らは犯人がサムソンだと分かると、彼の妻とその父を火で焼きます。サムソンはこれを知って、さらに怒ります。7 節で「あ

なたがたがこういうことをするなら、私は必ずあなたがたに復讐する。そのあとで、私は手を引こう。」と言って、彼らをとりひしいで激しく打ちます。報復合戦です。この結果、ペリシテ人はユダに対して陣を敷き、彼らと戦おうとします。これを知ってユダの人々は慌ててサムソンのところに来て、「あなたは何ということをしてくれたのか！」と責めます。あなたはペリシテ人が私たちの支配者であることを知らないのか、と。そしてサムソンを縛り、敵の手に渡しますが、ペリシテ人が近づいて来ると、サムソンに主の霊が激しく彼に下り、彼を縛っていた綱は火のついた亜麻糸のように解け落ちます。そしてサムソンは生新しいろばのあご骨を見つけて、それでペリシテ人千人を打ち殺してしまいます。一体これは何なのでしょうか。ただここに記されている出来事を読むだけでは、ここに何の意味があるのか、さっぱり分からないということにもなりかねません。

しかし 14 章 4 節の光のもとでこの章を読んで分かることは、これは「ペリシテ人と事を起こす」という主の御心が益々前進した記事であるということです。ここであるイスラエル人が、ペリシテ人との偽りの平和に生きるのではなく、むしろペリシテ人と戦っています。まさにその点で主の御心が進んでいます！今日の章にも、当時のイスラエルの低い霊的状態が示されています。それは 11 節の「あなたはペリシテ人が私たちの支配者であることを知らないのか」というユダの人々の言葉です。彼らはペリシテ人の支配を受け入れて、その現状に甘んじ、自分たちの召命に生きようとしていません。それどころかサムソンを敵の手に渡しています。ペリシテ人の言いなりの状態であっても、とにかく争いが起きないようにして欲しいという態度を取っています。主はまさにこの状態からイスラエルを救い出そうとして、一連の出来事に働いておられたのです。

私たちはこうした記事を読んで、でもやはり争いはない方が良いのではないか、主が進んで争いを仕向けられるとはどういうことか、と思うかもしれません。しかし参考になるのは、創世記 3 章 15 節の原始福音です。主はそこで「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。」と言われました。神の言葉よりもサタンの言葉を信じ、サタンとの同盟関係に入ってしまった人間を救い出すために、主はサタンと人間の間に「敵意」を置くと言われました。まさにそれと同じです。主はここでペリシテ人との間に「敵意」を置いておられます。彼らと仲良くし、彼らに仕えて生きるのではなく、むしろ主に従う民としての

生き方に進むためです。

その御心を進めるにあたって、私たちが改めて驚きを禁じ得ないことは、主はメチャクチャなサムソンを用いて、そのことをなさっているということです。前回見た通り、主がサムソンを器として用いているということは、サムソンがしていることすべてを主が承認・賞賛しているということではありません。サムソンは主のみこころを求めて行動していません。彼は主を無視し、また敬虔な両親のアドバイスも無視し、自分の好き勝手な生き方をしています。特別な怪力という賜物を受けている目的を正しくわきまえず、自分勝手に乱暴に生きています。一体こんな彼を通して主がご自身のみこころを前に進めているとは誰が想像したでしょうか。神のなさることは私たちの思いをはるかに超えて高く、私たちの及びもつかないほどのものである、と言わざるを得ません。

そしてこうした主の導きのもとで、サムソンも良い方向へ導かれています。彼は生新しいろばのあご骨を見つけて、千人のペリシテ人を殺しました。相変わらず死体にも平気で近づき、それを手にする無頓着なサムソンです。しかし彼は多くの敵と戦った後、18 節でひどく渇きを覚え、主を呼び求めています。ここで初めて彼が「主を呼び求めた」と記されています。彼も決してスーパーマンではなかった。彼は 18 節で自分を「しもべ」と呼び、またこの勝利は主が下さったもの、と主に栄光を帰しています。そして主に恵みを求めて祈っています！あのサムソンが！主はこの祈りに聞いてくださいました。神はレヒにあるくぼんだ所を裂かれ、そこから水が出るようにしてくださいました。サムソンは水を飲んで元気を回復し、生き返ります。そこでその場所はエン・ハコレ、「呼ばわる者の泉」と呼ばれるようになりました。ここはサムソンの信仰の生涯の中で最も光り輝く時の一つだったでしょう。そしてこれは次回見る 16 章の前奏曲となる部分です。サムソンは次の 16 章で地上の生涯を閉じますが、彼はその人生の最後に同じように主を呼び求め、主に頼ります。そしてそこに最も衝撃的なサムソンの生涯の頂点を私たちは見ます。しかしあれは突然あのようにできたのではなく、その伏線として、この章最後の記事があるのです。どうしようもないサムソンでしたが、ここで主に導かれてこのように主に祈り、主に頼る者へ導かれました。そしてこの信仰が最後にもう一度大きな光を放って、彼は主に栄光を帰すようになるのです。

私たちは今日の章から何を学ぶでしょうか。最後に三つのことをおさらいして終

わりたいと思います。まずこの章を読むことによって私たちが問われることは、私たちもユダの人々のように、敵対すべきものに敵対せず、偽りの平和に生きていることはないかということです。主に従うより、争いの少ない妥協した生活に甘んじていることはないか。自分の罪と仲良く平和に共存していることはないか。11 節のユダの人々の「あなたはペリシテ人が私たちの支配者であることを知らないのか」という態度が自分の内に見られるなら、それは非常に落ちた状態に自分はいるということです。主に従わなくても、まあ現状のこんなところで良いのでは？と勝手に落ち着いてしまっているなら。私たちは主に付く者として、悪との戦いに召されています。内にも外にも敵はいることを覚えて、自らを点検し、主に従うふさわしい戦いの生活へと進むことを祈り求めなければなりません。

2 つ目に、私たちは前の 14 章に続いてこの 15 章でも、困難な状況でもなお主にあって望みあり、と教えられます。士師記はこれまで見て来た通り、暗黒時代と言えます。民のリーダーとして立てられた士師までもがそうです。こんな人が本当に主の器なのか、と戸惑うような姿ばかりです。今日の章でもただ出来事を追うなら、そこにあったのは仕返しのやり合いです。私たちはそれらにばかり目をやる時、思わずうんざりするのではないでしょうか。しかしこれらの章が教えていることは、これら何の良いこともないように見える出来事のただ中にあって、主は良い御心を進めておられるということです。私たち人間が見て、理解していることだけが、その出来事の意味のすべてではない。私たちの全く思いもしないような仕方で事を導いてくださっている主がおられる。ですから私たちもどんなに絶望的と見える状況にあっても、このような主がおられるがゆえの希望を失わないようにしたいと思います。良いことが何もないように見える出来事にも、主のあわれみの導きがあり得るのです。いや主がそのように働き、導いてくださっているので、私たちは今日このように保たれているのではないでしょうか。私たちは仮に士師記のような時代に自分があると思っても、このように働くことができる主、また働いてくださる主に望みを置いて従う歩みへ導かれたいと思います。

そして三つ目のことは、サムソンに自らを重ね合わせて思うことです。サムソンを見ていると、どうしようもないと思われる姿が次々に記されています。しかし私たちは彼と違うのでしょうか。むしろ本質的には同じような者ではないでしょうか。しかしこの章最後のエピソードの慰めは、そんな彼が主を呼び求めた時、主は彼に

聞いてくださったということです。主は彼の願いを退けられなかった。むしろその求めに応えてくださり、なお彼を用いて下さった。主は御名を呼ばわる者に対し、このようにあわれみを示し、砂漠の地に泉を湧き出させ、渇く者を潤し、回復させ、いのちに満たしてくださる。主は同じように今日も、サムソンのような愚かな者たちでも、呼ばわる者を軽しめたまわず、それに耳を傾け、ご自身のあわれみを注いでくださるお方です。この主の恵みの導きの前に自らを点検して悔い改め、同じあわれみによって生かされていることを感謝し、またこのような者が呼ぶ時に豊かに答えてくださることに信頼して主の名を呼び、私たちの行くところでエン・ハコレ「呼ばわる者の泉」の祝福を体験させられ、主に用いていただく者の歩みへ向かいたく思います。